

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第五部 第三十三章

Let's kannpai for now.

— とりあえず 乾杯 —

峯村 明

目次

Let's kannpai for now	
お願い	2
登場人物	3
Let's kannpai for now	5
Dialogue	12
あとがき	21
奥付	22

Let's kannpai for now

お願い

ダウンロードありがとうございます！

さて、ただ今『リ・コンストラクション』をリライト中なわけですが、

第二十三章・初版(2025年7/31発行)～最終章・初版(2026年2/15発行)をお持ちの方は、そちらを処分していただき、とにかく、無視してください！

リライト版は初版とはかなり違う展開になっていますので。
(2026年7/25以降発行が新しい版です)

26年09月09日 記

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
ひろ	健の妻
真	健・ひろ夫妻の子
イリチャ	真の魂体
レル・ヴァリス	H&L財団・医療チーム
ヘルガ	//
マックス・ペイリー	古生物学者
アルチニア	『化学者の館』の化学者

cast33.JPG

Let's kannpai for now

317.

長い、長い、長い夜だった。コンテナ内部は外光からいっさい遮断されていて、今は夜なのか朝なのかわからない。

医師たちはもがき苦しむ患者をせめて眠らせようといろいろ試みたが、効果はなかった。

ちぎれた神経、血管、筋組織、骨を、麻酔なしで元通りに接合させようというのだから——できるものならこんなところにいたくないと、桧山健は切実に思った。

イリチャ本人は「どっちでもいいよ」と素っ気なかったが、健は、いなければならない、と思った。

あの時——マミヤを失い、むなしい抵抗の末に生きたまま心臓をえぐられるという、絶望と、痛みさえ感じない虚無とを経験したオレには、それができる、と思った。

イリチャはなにも失ってはいない。彼は真のために生きなければならない。痛みは生への扉だ。

イリチャの無残な傷を正視することができる。

彼の絶叫を聴くことができる。

彼の右肩を力いっぱい押さえつけ、ただ勇気づけの言葉をつぶやくことができる。

そして彼はついに祈る。

健自身、叫ぶことも泣くこともできない痛みを通して。

オペの間中、健は祈り続けていた。祈りながら、深く沈潜していくと、向こうから何かが近づいてくる。

光 光

水面に映える橙の色。金色の光線。そこに立つ、懐かしい人影。

なぜ、こんな時に……

健は不審に思う。

この少女は自分にとっていったい、何なのだ。

金と橙の光の中、ほっそりした肩が動き、長い髪がふわりとなびき、振り返った面がこちらを見ている。

黒い瞳。

はっと見直そうとすると水面に落ちていく陽の光が目に入り、あたりは光に覆われてしまう。

そのイメージの中にいる間、イリチャが眠ったように安定した状態にあってドクターたちの仕事のはかどったことなど、健は知らない。

ただ、酸素マスクの下でイリチャがなにかつぶやくのをみた。

理由もなく、彼が同じイメージをみているのだと健は思った。『どうした』とつぶやき返す。

《……ダレ？》

『……………』

《コノヒトハ……ダレ？》

この人……奈々子のことか？

なんと応じようか迷ううち、イリチャは再び絶叫を迸らせ、手術台を蹴ろうとあがき、「肩！！　しっかり固定して！！」と、叱責の声が飛び、金属の手術器具が触れ合う音が交錯する。永遠のような時間。

オペが終わりに近づき、ドクターたちが最後の仕上げに取り掛かかって健がイリチャの

右肩を押さえる必要がなくなったとき、離れる手をイリチャの右手が追ってきた。

「もう大丈夫だ」といってやると、彼はうなずき、低い声で言った。

《ぼくを、ぼくたらしめるもの、ぼくたらしめる力》彼は健の手を強く握る。《それがあなたから来る》

なんのことかわからず、思わず「……オレ？」と聞き返すとイリチャはまたうなずいた。《あなたのなかで、反射している》

ヴァリス医師がオペの終了を宣言したので、会話もそこで終わった。

318.

今日が何月何日で、季節がいつなのか、まるで思い出せない。薄暗い空は早朝か宵か、それとも、この地方によくあるように、曇っているだけなのか。

しかしいくらか湿り気のある空気は新鮮で心地いい。吸い込み、体中にいきわたらせると、細胞のひとつひとつが満足の声を上げる。

柔らかな手が彼の上体を支え、目元に心労をにじませた顔が黙ってみあげている。

暴れる患者を長時間押さえつけて感覚のなくなった右手をけだるくあげ、努力して握り、ぐっと親指をたててみせる。

ほうっと深いため息、柔らかな手は上体をそっと抱きしめてくる。

「ありがと、健、ありがと……！」

「オレは見てただけだ。ひろ。礼ならドクターたちに言ってくれ」

奈々子が亡くなってかれこれ十年が経つ。

西ノ宮夫人はひとり娘の奈々子の三回忌を済ませて、引っ越すつもりだというようなことを、健は聞いた気がする。あの時はもう会う機会はないだろうと思っていた。

それがなぜ……

なぜ……エドミールなんかと！

それに――

コンテナを離れ、バンケットホールの残骸の外で、壁に寄りかかってぼんやりと空を眺めていると……誰かが近づいてきた。足音はひとりではなく……

319.

アルチニアの姿を目にしたときから、もしや、という予感があった。それにしても、まさか、だった。

ペイリー……

ペイリーと連れだってやってきたのはレル・ヴァリス。

彼らは黙って目を見交わす。

そこへもうひとりやって来た。

片手にフルートグラス、片手にスパークリングワイン、脇にトレイを手挟んだ秘書、パウジーニ。彼は割合安定のいい瓦礫の上にトレイを置き、グラスを並べ、いそいそとボトルを開けた。三つのグラスに飲み物を注ぎ、にっこりと笑い、何も言わずに立ち去る。

何に乾杯する？

まず、オペの成功に

ペイリーの無事に

三人の再会に

乾杯

320.

「ぼくらは昨日の朝、ブリュッセルに到着した。到着して、空港を出てすぐだった。郊外で爆発事故があって火災が発生してるっていう、警察無線をひろったんだ。地元の消防車と救急車に召集をかける無線だった。ぼくはたまたま、本部へ向かうためにコレより小型のコンテナを.....普通の救急車サイズ.....運転してて、コレよりずっと身軽だから、現場へ向かうことにした。明け方の空^すいてるハイウェイを、回転灯スイッチオン、サイレン鳴らして、すっ飛んでったんだ」

「なんかうれしそうだな」レルは小学生の時分から故郷フィンランドの凍結路を車で走り回っていたと知っている健はちゃちゃを入れずにいられない。

「あのね」天才的外科医も旧友を前にすると十五歳の少年に戻ってしまう。「爆発事故だの負傷者だのって、ウチの守備範囲そのまんまなんだよ、何を置いても飛んでくよ、当たり前だろ。

で、無線の内容から現場は牧場で、正確な座標もわかった。近くまで行ってみたが、遠くで火の手が上がってるのが見える、けど、牧場だから広いわ、日の出前で暗いわで、進入路がわからない。

うろうろしてたら、道路わきに人影を見つけた。そいつ、ぼくの救急車みたいなコンテナみて隠れようとしたんだな。救急車両から隠れようってどういうことだろ。ひょっとして爆発は事故じゃなくて事件？ 事件の関係者？ 犯人？ とにかく、こいつに進入路の場所を聞いてみようと思って、コンテナで回りこんでゆく手をふさいだんだ」

「ったく、荒っぽい運転しやがって！ こっちは轢かれるところだった！！」

「え。そのこそそした怪しい奴はペイリーだったのか？」

「そうなんだよ。顔を隠してものすごく怪しい態度で逃げようとするから、ぼくは車を降りて行って紳士的に尋ねた。『もしもし、救急隊です。牧場の進入路はどこですか？』って。そしたら、彼、ぽかんと棒立ちになって、顔を隠すのをやめたんだ」

「レル！？」「ペイリー！？」「ウソだろ！？」

あんまりびっくりして、ぼくたちはそのまま手を取りあって再会の踊りを踊るところだった。助手席にいたヘルガが声をかけてきた。「パトカーがこっちへ来るわよ」

「まずい！」ペイリーはびくっと飛び上がった。「レル！　ちょっと匿ってくれないか、事情はあとでちゃんと話すから」

「.....警察に追われてるの？」

「そうだ！　いやそうじゃない！　ええい、とにかく匿って！　連れもいっしょに！」

その時になってはじめてペイリーがひとりじゃなかったって気がついた。

「それがアルチニアさんか」

「それともうひとり」

「もうひとり？」

「アルチニアの仲間さ。火傷しちまって、アルチニアが隠れ家から無理やり連れ出した。ここで、治療してもらってる」ペイリーは顎で大型コンテナを指した。

321.

オペの最中。

大型コンテナ内の処置室という色気のない部屋で、採血されたサーディクと付き添いのユミコは一晚を過ごした。部屋へ戻ってかまわないと言われていたが、今まさに緊急の大手術をしているという時。戻って眠る気にはなれなかったのである。そんな時に話が弾むはずもなく。

ユミコはただ、過日の間宮神社での失態を詫びにきたのだと来訪の目的を告げた。

「そのために？　わざわざ、ベルギーまで？」

「はあ、お詫びしようにもお電話の番号もご住所も存じませんし。困っておりましたら、宮司さんがこちらの財団のことを教えてくださったんです。宮司さんの娘さんご一家がこちらで貴方と合流することになっているから、必ず会えるはずだとおっしゃって.....」

「そうでしたか.....しかし.....」

「……………」

「私はなにも気にしていません」

「でも……日本へ来られた目的が……宮司さんとお話ができなかったのでは……？」

「ああ。宮司と会ったのはあの時が初めてですが、なに、話ならいつでもできます。宮司の娘ごの家族とはとても長い付き合いなのです」

「桧山さんのことですね」

「ええ。桧山夫妻とは縁があるのです。だから、話ならいつでもできます。どうかもう、気にしないでください。それよりも、貴女がお元気そうでなによりです」

「……恐れ入ります……」

沈黙

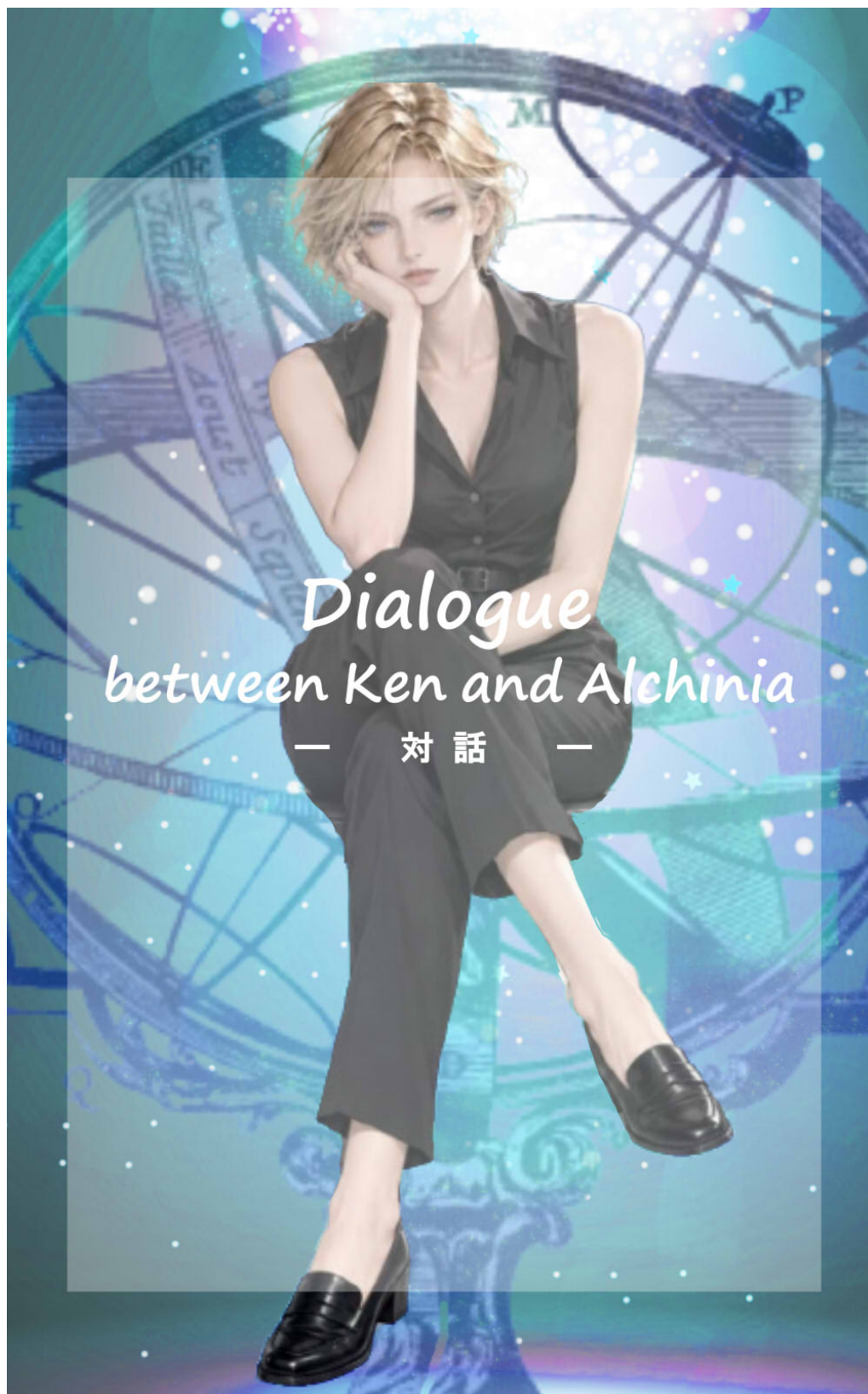
「ヒヤマが、貴女のことを、なにか、聴き慣れぬ名前と呼んでいませんでしたか」

「西ノ宮……結婚していた時の名です。亡くなった娘も西ノ宮。桧山さんは私が離婚して竜門渚という元の姓に戻ったことをご存知ないのです」

「リュウモンブチ……不思議な響きですね」

「ドラゴンが棲む深い泉、という意味です」

Dialogue



322.

過日、ゴビ砂漠から逃げてきたペイリーがブリュッセル空港の外で襲われ、負傷した。通りすがりのアルチニアが彼を病院へ連れて行ったところでまたもや襲われ、健とボディーガードXとが介入、途中イリチャも加わり、彼らふたりをアルチニアの隠れ家まで送り届けた。

これはその日の夜更けにアルチニアと健との間で交わされた対話の記録である。

健は、まず、アルチニアが警察に追われている理由を知りたかった。そもそも発端は、旧友で古生物学者のペイリーがゴビ砂漠のどこかで巨人の骨を掘り当てたことにあった。ペイリーも現地で『当局』を名乗る者たちから銃撃されている。そしてこの時はまだ、アルチニアを追っているのが警察だけではないということを知らなかった。

健の前世・ヒューダーはアトランティス時代、ネウトラ評議会に属し、アルチニアは『化学者の館』という化学者集団に属していた。このふたつの団体はさらに数万年を遡る巨人族への対応と認識の違いに端を発している。そのため、ふたりは互いに面識がなかったわけだが、巨人については議論の余地はなかった。それは確かに存在した。

そうですね.....ペイリーさんは巨人を巡って危険な目に遭い、今ここに居ます。そのことについては、追々、お話ししましょう。

アルチニアの声は高く澄んでよく響き、発音は美しく、聞き間違えようはなかった。

どこからお話ししましょうか.....そう.....メッサナの黄金時代へ遡りましょう

323.

アルチニア： 智と美の殿堂メッサナが栄えた黄金の時代、その最高峰が『化学者の館』でした。

健は同意する。評議会と『化学者の館』の間にかつてあった対立は歴史の彼方に沈み、もはや知る者はいない。『化学者の館』が世界の智の最高峰であったことは周知の事実である。

アルチニア： 太陽、月、星の動きからなる様々な自然現象、人間の社会共同体の成立、法と倫理の成立、道具の発明、など、注意深く観察するなら、存在の境界を越えて、宇宙と人は抽象的に同一であり、そういったすべての現象にひとつの共通する原理があることがわかります。

『化学者の館』の構成員を単に『化学者たち』と呼びましょう……『化学者たち』にとって、完全な金属である金ゴールドの探究は、倫理の探究でありました。

ゴールド金の探究は人類をより高い次元へと押し上げる、そういう認識のもとに、『化学者たち』は日々、研究に邁進していたのです。

健： 『化学者の館』で行われていたのは、『化学者たち』のためのものではなかったと？

アルチニア： 人類をより高い次元へと押し上げるため、でした。けれど、当時すでに金ゴールドを異なる角度から見ていた者たちがいました。たとえば、権力と財力の象徴として。それは『化学者たち』が目指していたのとはまったく異なるもので、あれから一万年後、アトランティスのほとんどが海中に沈み、滅びる引き金になりましたけれどね。

324.

アルチニア： 時代は下り、ずっと下ります。中世ヨーロッパ世界で、科学と魔術は同じものでした。金の錬成は自然科学であり、化学でした。

中世の哲学を前提に、人間が精神的な完全さを目指し努力するのと同様に、地球上の物質も完全的物质になることが可能であると考えられていました。

すべての自然物は精妙に調和して収まり、万物はマクロコスモス宇宙とミクロコスモス人の照

応によって結びついてた。占星術は大学で教えられ、数学や医学とも深く結びついていました。

世界史の中に化学者たちの影がみえます。

十六世紀、南米の文化から搾取した金によって奢ったスペイン。その無敵を誇った艦隊（アルマダ・インベンシブル）が、どこへ行っても壊滅的な気象現象に襲われました。結果、艦隊は沈没し、歴史の舞台はスペインからイングランドへと移りました。

健： イングランド人が神がかり的な奇跡と呼んだ、グラヴリーヌ沖海戦（1588年）？
スペイン艦隊はとんでもない悪天候に見舞われたという、あれは、まさか、操作された天候——？

アルチニア： 当時のイングランドには錚々たる人材が顔をそろえていました。
フランシス・ベーコン、ウォルター・ローリー、ワード・デ・ヴェア、フランシス・ドレイク、フランシス・ウォルシingham、エドマンド・スペンサー、クリストファー・マーロウ、ウィリアム・ローリー、ランスロット・アンドリュース、トビー・マシュー、ジョージ・ウィザー、トーマス・ハリオットなどなど。
メソアメリカと南米を蹂躪したスペインは、世界史から去らなければならなかった。

アルチニアは、にっ、と壮絶な笑みを浮かべた。

325.

健： スペイン無敵艦隊の時代、イングランドはたしかエリザベス一世の治世ですね。フランシス・ベーコン、ウォルター・ローリー、フランシス・ドレイク、フランシス・ウォルシingham、教科書に載っている名前ばかりだ。なぜ、それだけの人材が女王の宮廷に揃っていたんだろう？

アルチニアの返答は笑いを含んでいた。……育てた人たちがいたのしょうね

それは——と健。

アルチニア： 私たちは幾度も幾度も、転生を繰り返しています。それこそ数え切れないほど。今のあなたは『あの時代』の記憶を鮮明に持っていますが、記憶に上がらない無数の記憶も持っているのですよ。

オレはそれを聞いて思った。スペイン無敵艦隊の時代、エリザベス一世の治世の十六世紀、我々の財団はその時も存在したんじゃないかと。

『あの時』、『化学者の館』の人々はアンベレオ王国の迫害に遭い、ついには館ごと煮えたぎる黄金となり、知識のすべてを敵対者に渡すことなく、持ち去った。

彼女の話によれば、化学者たちは転生のたびに同じ課題を持っていた。つまり、人類を精神的により高く導くことだ。そして、H&L財団の理念は表現こそ違うものの、同じものを目指していた。オレやラウレンス先生のようなネウトラ評議会の人間は、意図していたにせよ、そうでないにせよ、化学者たちに力を貸していた——

—

それは今、この時代においても——レルのつぶやきに健は応える。

そうなんだ。無数に転生してきたというが、どうしてこの時代なんだ。オレはそう問うた。するとアルチニアは——

——彼女はこう言ったんだ。それは、今が『紛争の時代』であり、『暗黒の時代』。あるいは、『鉄の時代』の終末期だから、と。

アルチニア： ヨーロッパでは中世からこの時期にかけて、フリーメイソンリーやテンプル騎士団、シオン修道院など、あなたがたも一度は耳にしたことのある有名な結社が歴史に登場します。

この時代、強大で影響力のある組織が公に表れるとすぐに注目を集めました。そのグループがより目立ち、資金力が充実すればするほど、乗っ取りを企む者たちの標的になりやすくなりました。

化学者たち

彼らの活動は、時の宗教に抵触することもあれば時の支配体制から敵視されることもありました。事実、多くの結社が乗っ取られ、あるいは、変質することになったのです。それら結社のうち、本来の設立理念を貫いて生き永らえたものは、ほぼありません。

327 .

アルチニア： お話を元に戻しましょう。

化学者たちの目的は、端的に、人類を高い次元へと導くことであり、自分たちの肉体が減び、文明が減んだあとも、その志は変わりませんでした。より具体的にはかつてアトランティスがあった場所、アメリカ大陸に、メッサナが象徴する文明を再建することだった。この計画はある程度進んだところで頓挫しました。計画は、失敗した。

近世に、アトランティス再建に失敗しました。要因のひとつは、人類を導かんとする『化学者たち』の間で分裂が起きたことです。そのことによって外部から様々な思惑、そして秘密の結社が入りこんだ。

植民地時代を経て、多民族がアメリカ大陸に入植、独立戦争（1776年 - 1789年）、米英戦争（1812年 - 1815年）、打ち続く戦争、アメリカの財政は傾いていきます。そこへやってきたのが国際金融資本。彼らはアメリカという国にお金を貸し、その利子で利益をむさぼった。

そして南北戦争（1861年 - 1865年）のさなか、時の大統領は国際金融資本に頼らず、政府独自の通貨を発行した。それが——大統領暗殺に繋がったのです。

健： アメリカ南北戦争中の大統領とは、リンカーンのことだろう？ 彼は観劇中に南部の人間の手にかけられたのではないのか！？ 歴史ではそう——

アルチニア： 表向きはね

健： ——最近、似たような話を聞いた。

1963 年、ケネディが暗殺された。その五ヶ月前、彼は米国財務省に対し、40 億ドルの紙幣発行を承認する書類に署名していた。（第三部 十八章 Gold standard）

アルチニア： ——現在アメリカにおいて紙幣を発行しているのは米連邦準備制度理事会＝FRB、いわゆる中央銀行ね。財務省ではないわ。

健は黙ってアルチニアを見つめる。見れば見るほどこの女性は.....

ケネディ大統領の話題が出たところで、アルチニアに対する第一印象が心の奥底から浮かび上がってくる。

ケネディ四十五歳の誕生日に、おそろしくシンプルで、おそろしくエロチックなドレスをまとうて公衆の前に現れ、『ハッピーバースデー・ミスタープレジデント』と歌った女優。マリリン・モンロー。その歌声と表情をインターネットで確かめることができる。

ケネディ暗殺のほぼ一年前にモンローは亡くなっている。死因は薬物過剰摂取による事故、自死、不倫関係にあったケネディによる謀殺説など、謎が多い。ちなみに、例の『ハッピーバースデー・ミスタープレジデント』は彼女が亡くなる三ヶ月前の出来事である。

あのハリウッド女優と、アルチニアは瓜二つとっていいほどよく似ている。けれど、あの息が漏れるような独特な話し方、茶色がかった青とも灰色がかった青ともいえる瞳のモンローに対し、アルチニアは強く張った弦楽器を弾くように硬質^{はじ}な声で淀みなく話し、瞳は澄んだブルー。

ヒューダーの記憶はこの色をメッサナ・ブルーとして覚えている。

この女性が『化学者の館』のアルチニアであることは、当時の彼女と親交のあったマミヤ、メッサナ総督パンテオラ（H&L法務部部長ドストエフスカヤ）、総督代理パルダリス（同副部長レオニド）らが面談を通してアルチニアその人に間違いないと証言している。彼らは揃ってこう云った。「外見はともかく」、と。「アルチニアだ」、と。バラムと

バランケも同感だと云っている。ネコがそういうなら間違いあるまい。

ありていに言って、モンローとアルチニアとは同一人物ではないかというのが健の思いである。

すると、アルチニアは澄ました顔で言った。「ええ。時々間違われます。だから人前に出る時はサングラスで顔を隠してるんです」

1963年6月4日付けで、アメリカにおいて発行された大統領行政命令 第11110号を元に、ケネディ暗殺に切り込むつもりだと意気込んでいた米国人シナリオライターの話が出たのはポルタアウレアでのことだ。

その話を持ち出したラウレンス氏は、シナリオライター・ボブとはついに連絡が取れないのだと言った。それは、健の曾祖父・桧山正太郎氏がなぜポルタアウレアと絶縁したのか、という話の文脈上のことだったのだ。

あとがき

資料を繰るうちにそんなところへたどり着いてしまったんですが、今回の後半は、ちょっとしんどい話です。

物語の中では薔薇十字のような固有名詞（おっと）を使ってませんが、『化学者の館』＝化学者たちは名称不明のなんらかの地下組織を結成している、という設定。まだ構築中で、アルチニアさんにはもう少し語ってもらうことになりそうです。

ところで、アメリカ建国にいろいろと不思議な力が働いていたというのはわりと有名な話かと思いますが、（強引に）二百年ばかり遡ってみると、スペイン無敵艦隊、エリザベス1世の時代。この頃から新大陸、新世界への、ある意味、憧憬があったわけです。

ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、この時代を舞台にした『七つの黄金郷』という漫画があって、完結することなく途中で途絶えてしまってます。中断してから五十年近く経ってる勘定になります。この度、探るともなくこの時代を探ってみると、もしかしてもしかしたら、こ～んな話だったのではないかなあと、おぼろげに感じるものがありました。

minemura は『七つの黄金郷』が大好きでして、ある時作者先生の住所を知る機会があり、ファンレターなるものを書き送ったのですが...おてまみは「あて所に尋ねあたりません」かなにかで、届かずに返ってきました。Y先生にはどこでどうしていらっしゃるものやら。

それはともかく、漫画自体は三部までで中断してて、ひょっとしたらすごく初期の部分だったのではないかと思われるのですよね...それと、クレメンテ公の、とても高貴な出ではという、母親の出自もなんとなく。

一読者としては、この話が完全な形で、ある日とつぜん、世に現れる、そんなことを夢見ています。

2026年9月9日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十三章 Let's kannpai for now

2026 年 9 月 10 日 初版発行

著者 峯村 明 E-mail dbailai388@gmail.com

表紙素材 「イラスト AC」 「Chat GPT」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

℥ Akira Minemura 2025-2026

著 者 峯村 明
イラスト イラストAC
イラスト Chat GPT

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社